

特 集 Ⅱ

バドミントン部

座談会



日時 平成20年7月5日

場 所

アルカディア市ヶ谷

出席者

バドミントン部

峯 尾 裕 子 (高13回)
横 山 佳 子 (高14回)
石 塚 正 英 (高20回)
和 田 真一郎 (高34回)
内 海 理恵子 (高47回)
(敬称略)

編集部

司 会 高橋 誠 (高26回)
写真等 久島 士郎 (高28回)
記 録 佐藤 恵子 (高40回)

司会 高26回の高橋でございます。本日は暑い中お集まりいただき、ありがとうございます。

さっそくですが、最初に皆さんに自己紹介を兼ねて、バドミントン部とのめぐり合いについて話していただき、その後に創設当時の話を、時代を追って聞かせていただきたいと思います。

入部のきっかけは五人五様

峯尾 私は小学生の頃から運動大好きで、高校に入ったら“テニス部”と決めていたのですが、その当時、“女子お断り”で、バドミントン部



峯尾裕子さん

に入りました。今回友人から「優勝したでしょ」と言われたけれどあまりにも昔の事で、記憶になかったです。

大学に入ってからは硬式テニスをやり、10年前までやっていました。バドミントンをやっていたお陰でスナップが利き、テニスをやるときにはサーブとスマッシュがうまいと言われました。最近では夫とゴルフを楽しんでいます。

横山 私は、小学校、中学校とずっと体育が苦手だったので、高校に入ったらそれを克服しようと思い、運動部だからという理由で入部しました。



横山佳子さん

女子が入れる運動部はバドミントン部だけ

だったと思います。

他の人は、おそらく90パーセントが、バドミントンが好きとか、運動が得意とかでしたでしょうが…。平成20年5月3日に上越市やすねで行われた「創立50周年を祝う会」で、顧問だった徳山((晏)・旧姓藤島)先生にこのお話をしましたら、「でしょう」と言われてしまい、私を教えるのに苦心された様子がうかがえました。ですので、入賞とか遠征とは程遠い存在でした。

当時、皇太子、今の天皇陛下の御成婚がありました。「テニスコートの恋」ということでテニスブームになり、バドミントンとは違うのですが、同じ、ラケットを使うスポーツとしてバドミントン部に入る女子が多くなったのかも知れません。同期で7、8人でした。

石塚 私はすぐ1つ上の兄がおり、就学前からずっと一緒なものですから、兄の真似をしていたものです。中学時代、兄は地質クラブに入り、私も地質クラブに入りました。



石塚正英さん

高校に入ってから、最初は地学部に入ったのですが、このまま兄の真似をしてはだめだと思い、勉強と全く違うスポーツをやろうと思い、バドミントン部に入りました。

あの頃はジャージがめずらしい時代なのですが、高田高校のバドミントン部のグリーンのジャージが格好よかった。それで、それに憧れてバドミントン部に入りました。朝4時に起きて仲町の自宅から直江津の浜

辺に行き、6時半頃まで砂の上を走ってから高校へ行きました。自主トレですね。ジャージを着て、動くのが楽しかったです。

もう一つは、高田高校には女子が少なかったのですが、バドミントン部に入ると女子と一緒にになれるという不純な動機もありました(笑)。そのまま部長になり部活に突っ走り、成績ががたがた落ちていきましたが、後悔はしていません(笑)。

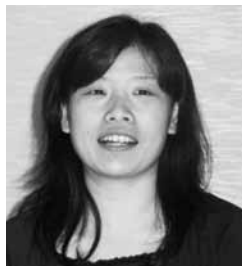
和田 高校では運動部に入ろうと思い、まずは中学で経験していない部ということで、野球とかバスケットとかは中学からやってきた人がいるので、そうではない部活でバドミントンを選びました。



和田真一郎さん

また、石塚さんと同じですが、高田高校では女子が少ないということで、女子と一緒に活動できるバドミントン部が楽しそうだなと思い入ったんですが、入ってみると結構大変でした。

内海 今は共働きで、2歳の子供を育てています。



内海理恵子さん

バドミントン部に入ったきっかけですが、小学校・中学校と水泳をやっているとして、高校でも最初は水泳部に入ったんですね。でも私の他に女性がいないので、これはやりづらいなと思いました。そのとき、中学校のときに一緒にやっていた友人がバ

ドミントン部には入っていたんで、私も真似して入りました。初めに顧問の先生に「バドミントン部に入りたいんです」といったら、「バドミントンではなく、バドミントンだ」と怒られて、この先生は怖いなと思って不安になったのですが、何とか3年間やりました。

女子部門でスタートした草創期

司会 峯尾さんや横山さんが入部されたときは、バドミントン部が発足した草創期だと思います。当初は女子部門だけでスタートして、男子の部門はその後にできたようですが、最初の頃のことを詳しく教えてくださいませんか。

峯尾 第1回卒業生と思っていたのですが、自分達の上にも2、3先輩がいらっしゃるようなことを聞いており、私はバドミントン部の2回生になるんでしょうか。

石塚 私が確認した限りでは、峯尾さん、石川紀子(高13回)さん達の年よりも上の方は確認できませんでした。ただこれは卒業まで在籍した方のみで、途中で受験のために退部された方は入っていません。卒業まで在籍していたのは、峯尾さんたちが最初だと思います。

司会 そうすると、峯尾さんがお入りになったときは、既に何人か先輩がいらしたということですか。

峯尾 最初は、我々より2年先輩の江口さんが発起人となり、バドミントン同好会として立ち上げたそうです。12回生の入会者はなく、元気がいい13回生が入会勧誘のターゲットとなり、強引に入会させられた者

あり、私のようにテニス部を断られ仕方なく入会した者ありで人数が増え、同好会ながら“部”並みの待遇を受けていました。その証拠に、我々が1年生の時糸魚川高校で試合があった時は、壮行会があり、応援団がかけつけてくれました。いずれにせよ、男子中心の学校にあって数少ない女子中心の運動部を応援しようと、学校あげて大事に育てていただきました。

3年生の時、小林&河端がダブルスで北城高校に勝ち、優勝してやっと存在を認められ、“部”に昇格しました。

横山 先だつての、徳山先生の話聞いても、前にあったような口ぶりでしたが、そこらのはっきりしません。私の記憶でも、2年上にはいらっしやらなかったような気がします。

3年生になると、女子のみで編成されたクラスが出来、当然担任は丸田先生でしたので、折につけ「まだ、部活やっているんですか」と言われてました。2年上でも同様だったのではないかと。それでやめられたのかも知れませんね、推測ですが。私は2年時から入って、3年1学期で辞めました、あまり長く在籍していませんでした。



石塚 名簿で追跡できたのは、昭和36年3月卒業生（高13回）が初めてです。

司会 その当時は、どこでどんな練習をされていたのですか。

横山 講堂で、剣道部も、卓球部も一緒でした。シャトルが飛んでいってしまうので、「すみません、すみません」と言いながらやっており、肩身が狭く、端の方でやっていました。

和田 体育館は何部が使っていたのですか。

横山 バレー部やバスケット部、体操部などが使っていました。

峯尾 人数は、いつも5、6人でしたね。

司会 初めから徳山先生が顧問をやっていたんですか。徳山先生は、バドミントンの技術的指導もやっていたのですか。

横山 そうです。

司会 ほとんど毎日のようにいらしていたのですか。それは当時としては異例だったのでしょうか。

横山 先日、「どうしてバドミントン部の顧問を引き受けられたのですか」とお聞きしたら「とにかく若かったからね」というお話でした。校長先生の命令だったのかも知れませんね。

石塚 当時、先生は腕が強かったから、やっていること自身が楽しかったのかも知れませんね。ラリーも強かったです。

司会 女子が最初にバドミントン部を作って、その後男子の部ができたそうですが、その当時、女子は高田高校にどれぐらいいたのですか。

峯尾 一学年40名弱かしらね。

横山 私達のときで、一学年7クラスで310

人中女子が54人。上の学年が30数名で、下の学年が70名位。一年で20名位ずつぐんと増えていった時代です。

司会 そのような状況でも、女子が入れる運動部は、バドミントン部しかなかったんですか。

峯尾 ここしかない。選択の余地はありませんでした。



1960年春頃

男子部門発足後

司会 石塚さんがお入りになったときは、もう男子部というのは、基盤がしっかりとされていたんですか。

石塚 女子とは練習は一緒ではなかったですね。男子はそれなりに独立していました。

最初に男子の部を作った市川進さん（高14回）や瀧澤猛（高15回）さんなどは、夕方仕事が終わった後に、高校にバドミントンの練習に来られていました。市川さんは相当長い間、高田で後輩に教えていらっしやいました。動機は、会社でむしゃくしゃすると、後輩と一緒に打ってですね、わりとリフレッシュになっていたのかも知れないですね。

私はこの市川さんに会いたいがために、

50周年を考えた面もあります。5月3日にやすねで行われた50周年の時に、市川さんに会うことができました。

司会 その時の男子部員は何人ぐらいいらしたのですか。

石塚 卒業までいた人数は、40年入学で6人ぐらいいますね。一年、二年上の男子も5、6人います。

峯尾 男子部はいつできたのですか？

石塚 高14回のときからです。

横山 男子は、いつどこで練習していたか分からないような感じです。

司会 横山さんがお入りになった頃、その頃はまだ男子は部ではなくて、サークルのような扱いだったのではないですか。男子と一緒に練習したことはありますか。

横山 ほとんどありませんでした。女子だけでしたね。

司会 先ほど話ができましたが、その頃優勝したという記録もあります（編集部注：昭和35年、峯尾・小林組が上越大会においてダブルスで優勝）。その時の思い出はあまり鮮明ではないですか。

峯尾 あまり記憶がありません。他の学校でやっている人が少なかったからではないでしょうか。

横山 遠征とか行ったのではないですか。

峯尾 新井ぐらいですよ。

司会 少し時代が下って、和田さんの時代はどうでしたか？

和田 私の頃は、男女一緒に練習していました。なので、部長も一人でした。全体で自分の学年で10人、男子6人で女子4人、私の上が4人、下が14人でした。



上段左より3人目が和田さん 1980年頃

私の時は、体育館で、バレー部とバスケット部の間で、一面コートを張って練習していました。水曜日だけは、バスケット部と交代し、2面使ってやっていました。逆に、バスケットに貸している時は結構走っていました。毎年一回、全校10kmマラソンがありましたが、ちょうどそのコースを練習で走っていました。

バドミントン部の練習風景 ～とにかく練習でよく走った～

司会 バドミントン部の人はよく走っていたようですが。その伝統がずっと生きているのでしょうか。

和田 毎日5km、週一回10km走っていました。

石塚 自衛隊駐屯地の周りを走るんですね。自分達の時代も良く走っていました。練習に遅れてきたら、一人で走るんです。他の人がシャトルを打ち始めていても、自衛隊の周りを回ります。

司会 結構な距離ですね。5kmだと30分くらいですか。

石塚 10kmを40分から50分位で走って

いました。

司会 相当早いスピードですね。これだと、10kmマラソンで、上位に入賞できますよね。

和田 バドミントンの羽は風の影響を受けるので、窓を閉め切ってやるんですよ。普段は他の部活もあるので、少し開けているのですが、夏休みはコートを独占できるので、窓を閉め切ってやっていたので、大変暑かった記憶があります。

石塚 この前、練習を見たのですが、原則として今でも全部閉め切ってやっていました。

司会 バドミントンのシャトルの初速スピードは時速百数十kmと相当早いんですね。ですから相当激しいスポーツですね。

内海さんの時代はどうでしたか。やはり男女一緒に練習されたんですか。

内海 はい、基本的には男女一緒に練習をやっていました。私の代は、一年生の時は男性がいたのですが、途中で男性が皆やめてしまい、女性4人だけになりました。先輩や後輩の期には男性がいたのですが。



やはり、ランニングは毎日やっていました。男子はどこを走っていたのかは知りませんが、私たち女子は、南堀を一周していました。帰ってからは、「シャトルラン」という練習があって、コート内の4隅にシャトルを置いて、そこでフットワークの練習、その後にはラリーの練習、そして先生にシャトルを上げてもらってのスマッシュの練習、試合練習、と毎日決まった練習をしていました。

司会 シャトルランというのは伝統的な練習なのですか。

和田 自分たちはやっていました。

石塚 自分たちの時はやっていませんでした。自分たちは別のフットワークの練習はやっていましたが。いつか、誰かが考え出したのかも知れませんね。試合などを見に行ったときに、他チームがやっている練習を見て、それを取り入れようというのもありました。

司会 ずっとお話を伺っていると基本練習を重視されていたようですが、草創期はやはりランニングを随分やられていたのでは

ようか。

峯尾 私はあまり走ったような記憶がないですね。

横山 私も、徳山先生が右に左にシャトルを打ってこられるので、それを追いかけて走ったということです。部員同士でも、ネットは張らずに同様にしました。

ある時私の両腕を見比べて、「ホラ、右の方が左よりずい分太くなっているだろう」と言われ、事実その通りになっていました。

時代により異なる指導体制

司会 時代によって、かなり感じが違ってくるんですね。徳山先生の指導というのは、どれくらいまで続いたんでしょうか。草創期の頃は、毎日のようにあったというお話でしたが。石塚さんの時代は、先輩が来られていたということでしたね。

石塚 毎日来るのは先輩の市川進さんでしたね。女子の方は、丸谷承一先生が顧問でしたね。丸谷先生は、練習に出てきても飄々と見ているだけで、ご自分からは打たないんですよ。

ところが徳山先生は、来ると必ずご自分で打っていた。指導と言うよりも、ご自分の体力維持のためのようにも思われました。ですので、先生が投げて、それを打ったという記憶はないんですが、先生が打っている姿を見る分には、本当にやれる先生が顧問なんだなと思いました。私が高校を卒業した後も先生は打っておられたので、昭和40年代の後半まではやられていたのじゃないかな。



司会 どのぐらいの頻度で徳山先生は来られていたのですか。

石塚 週に2回ぐらいです。

司会 和田さんの頃は、どなたが指導をされていたのですか？

和田 私は徳山先生と入れ違いだったので、菊池(豊秋)先生と石田(徹)先生でした。先生からの技術的指導はほとんどなかったのですが、一緒に打っていくという形でした。この前、先生にお会いしたときには、「何もしてやれなくて申し訳なかった」とおっしゃっていました。

内海 自分達の頃は、メインは石井(充)先生なのですが、石田先生もたまにいらしていました。2年の時に、城北か直江津でバドミントンを教えていた瀧澤(卓)先生がいらして顧問に加わって、3年のときに直江津高校からバドミントンをやっていた藤尾(隆)という先生がいらっしました。まわりでバドミントンをやっていた先生がどんどん高田高校へ集まってきて、なんでこんなに一杯増えてしまうんだという印象がありました。

司会 正規の教員としてではなく、バドミントンの先生として高田高校にいらしたのですか。

内海 いえ、正規の教員として来られていました。

石塚 平成時代になってからの顧問について今、内海さんからお話がありました。石井先生は7年ぐらい担当され、その後、瀧澤卓先生、渋谷穰先生、横山典男先生と、今は選手を養成するような強いモチベーションで指導されますね。そのきっかけを作

られたのが石井先生で、いいことですね。

司会 選手養成するという意識で、相当組織だって練習のプログラムも力をいれているのですね。

先生の指導体制も、随分時代により世代により異なるものがありますね。合宿とか遠征とか、どんなことをやられましたか。
峯尾 当時は合宿で泊り込むようなことはなかったですね。赤倉ヘスキーに行ったことはありました。(若い藤島先生と美人の徳山先生が結びつきかけは、我々バドミントン部員が藤島先生の気持を察して赤倉スキーに両先生を誘ったからということでした。)

横山 その代わりというのではないのですが、合宿ではないのですが、バドミントン部として希望者を募って、7、8人で米山登山や笠島での水泳に行きました。徳山先生は、水泳の指導もしてくれました。

司会 米山登山などで、特別な思い出はありますか。

横山 徳山先生は、私たちはワンちゃんと呼んでいましたが、私たちにとっては、旧姓の藤島先生という方が印象が強いですよ。私が高3の時に徳山先生になりました。

「米山は高さ993メートルだったので、7メートル分人工的なものを頂上につけて、キリのいいちょうど千メートルにしたんだ」と教えられました。また、「登山は登りが大変だと思っていたんですが、実は下りの方がきついのだ」と下山後、膝がガクガクとなっている私達を見ておっしゃいました。米山は高度の割に傾斜が急なところがあり、そのことを体感しました。

水泳では、横泳ぎを教えていただいたのですが、懇切丁寧に、何回も何回も実演して下さいました。でも、私は泳げるようにはならなかったけど。

峯尾 バンカラで、先輩が高下駄はいてきた時代ですからね。鞆は革ではいけない、コートは紺でなければいけないと言われた時代ですから、何につけ今とは違いますよ。

遠征の思い出

司会 石塚さんの頃は、合宿とかかされていきましたか。

石塚 強化合宿とかはなかったですけど、遠くに試合に行くことはありました。新潟に行ったときは、新潟地震の1、2年後でしたので、流砂現象で土台が傾いている旅館に泊まった覚えがあります。その思い出は強いですね。試合は負けてしまったのですが。あとは、バドミントン部だけではな



いですが、みんなで郷津に海水浴にいった思い出はありますね。そのときはちょうど、内海さんのお母さんはいらっしゃらなかったもので、水着姿は写っていないのですが。男女で一緒に行って、楽しくやりました。

内海 私の母も高田高校でバドミントンをやっていたんです。

石塚 内海さんのお母さんの、伊藤恵子さんが女子部にいらっしゃいました。それはつい最近になって分かったのですが、びっくりしました。伊藤恵子さんが内海さんのお母さんだと知ったのは、若者がやる mixi（インターネットのサービス）を通じてで、内海さんが「私のお母さんもバドミントンをやるのよ」と書いてあったので、糸を手繰っていったら、伊藤恵子さんが内海さんのお母さんだったと確認できたんです。

新潟県がバドミントンで 全国一だった時代

司会 試合は、上越大会では活躍されていたとのことですが、県大会ではだいたいどれぐらいだったのでしょうか。

石塚 「県大会が一位であれば、全国一」というぐらい、新潟県がものすごく強かった時代でした。本間さんという強い人が柏崎だかにいて、バドミントンで著名でしたね。それで、新潟県では勝てませんでした。勝てば全国制覇という具合でした。

当時、ヨネヤマラケット、後にヨネックスとなりますが、これを使うようなやつは駄目なんで、カワサキラケットを使わないと全国に行けないという感じでした。今のSPEEDの水着じゃないですけど。本間さ

人もカワサキを使っていましたね。その頃の思い出が強いです。

司会 新潟県がそんなにバドミントンが強かった、あるいは盛んだったという特別の理由はあるのでしょうか。

石塚 どうなんでしょう。そんなラケットのメーカーがあったというだけでは理由になりませんものね。

これは、私が上越地方の個人戦で2位になったときの賞状ですが、上越だからなれたんです。これが中越だったら絶対に負けるんですよ。それは、彼らがいるから。でもこの時は、女子も男子もずっと私の決勝戦をコート脇に並んで観てくれて、気持ちよかったね。糸魚川高校の小柳君にはストレートで負けてしまったけれど。睨まれてこっちが萎縮して負けてしまいました。

司会 和田さんの時はいかがですか？

和田 県大会には行けませんでした。上越ではベスト8ぐらいでした。

司会 新潟県のレベルはその当ても高かったのですか。

和田 新潟県は、全国的には、そこそこ高いレベルだったと思います。

横山 雪国なので、外では運動できないからその分室内で強かったのかもしれませんが。

石塚 バドミントンはテニスもそうだけど、大理石の上でやる高級な、いわゆるブルジョ

ワのスポーツとっていたら、一日5km走るとんでもなく辛いスポーツでした。当時東南アジアは強かったです。インドネシアでは国技のようでした。新潟県で勝てば日本一、東南アジアで勝てば世界一と言われていました。

和田 私たちの頃、ラケットが木製から金属に切り替わっていきました。私はカワサキのラケットでした。

石塚 金属になってからも、ご自分でガットを張っていたのですか。

和田 そうですね。張ってましたね。

司会 その頃はテニスも一斉にラケットの材質が切り替わった時代ですよ。その頃もヨネックスよりもカワサキでしたか。

和田 まあ、両方ありましたね。私はカワサキでしたが。

交流戦で広がる先輩・後輩の輪

司会 和田さんの時代には、合宿とか遠征はありましたか。

和田 バドミントン部で一緒にどこかへ行



く、というのはありましたが、その当時は合宿・遠征はしていませんでした。レクリエーションのときは、同じバドミントン部でスキーに泊ったことはあります。

司会 それはどの辺でしたか。

和田 妙高の方ですね。

内海 私たちの頃は、合宿などは全くありませんでした。他の部はやっているのに、うちの部はなぜやらないんだろうと言っていたことがありましたけれども。バスケット部とかバレー部とかは、泊まりがけでやっていました。

多分石井先生が始められたと思うのですが、歴代の人達を集めて、夏休みに交流試合をやりました。

司会 歴代の方というと、どれくらい先輩方がいらっしまったのですか。

内海 どのくらい先輩かはよくわからないのですが、大分上の方が来ていました。近くの上の方も知れませんが。

石塚 高田で生活している人は、私よりも先輩の上野さんなども平成元年ぐらいに行っていたんですよ。どの世代というよりは、近場に住んでいて割と夕方に出やすい方がOB戦に出ていました。昭和時代の方がOB戦で懐かしくなって、その後集まるようになったみたいですね。8月の10日前後の土日くらいにみんな集まるようになり、楽しみにするようになったんです。

それ以前は、現役の人達が夏休みの強化合宿をするときに、必ずしもOB戦ではなくて、東京から卒業生が戻ってきて、練習に参加するというスタイルでした。それを明確にOB戦に変えたのは石井先生です。

非常にいいことをしていただきました。

司会 卒業した先輩が後輩の面倒をみるという部は、比較的少ないのではないですか。

内海 私の一つ上の、バレー部の先輩はこの前OB会へ出かけたと言っていたので、あるのではないのでしょうか。

横山 今はあるのではないですか。ラグビー部の甥が現役の高高生の合宿に参加しています。まだ大学一年生なので、自分も楽しみたい、と思うのでは。

司会 それにしてもよく後輩の面倒をみてる伝統がありますね。

横山 自分もやりたいのではないですか。それもありますよね。

石塚 大学が終わって就職するとまもなくなくなるけれども、大学の4年間はやりたいのではないですか。

内海 私も大学一年のときは行ったんですけど。

横山 1、2年下の後輩は知っているわけだから。

石塚 石井先生が平成になって顧問になってから、そういう伝統になったようです。石井先生以降、その後の先生達も受け継いでいますので、20年ぐらい続いていました。

内海 石井先生は、今新潟の県の方にいらっします。数学の先生です。

石塚 今年は8月12日にOB戦へいきます。藤井義浩先生が、学生、OBを集めることになっています。

草創期を振り返って

司会 草創期の頃の話に戻りたいと思いますが、当時から見て、今のバドミントン部

は違ってきているな、というようなことはありますか。

峯尾 いいえ。今の方を見ることもないし。

司会 先ほど話に出ましたし、文集にも、丸田先生に「2年生の終わりにはもう部活はやめなさい」と言われたという話が載っていますが、女子に対してそういうことはよくあったのでしょうか。

峯尾 たまたま女子クラスの担任が丸田先生だったので、皆さんにそう言ってらしたと思います。

横山 それは女子だけにではなかったようです。先日バドミントン部の「創立50周年を祝う会」でお会いした男性の方も、「みんな言われたよ」と言っていましたから。丸田先生は受験指導に対して徹底された姿勢を持ってらしたので。

徳山先生は、そうおっしゃる丸田先生に職員会議かなんかで弁護してくださったの

ではないかと推測しているんですけど。受験生でも勉強ばかりでなく運動も必要であると。

司会 当時はバドミントン部は女子主体ですから、女子はみんな言われたということですね。

峯尾 当時は女子だけでしたし、3年の担任が丸田先生でしたから。

横山 女子の99%は丸田先生の言葉に従順でしたし、私もその一人だったので、3年生になってバドミントン部はやめましたが、別の同好会を新たに作って活動していました。

石塚 まだそれまでは、一般に、女子はマラソンを走るもんじゃない、というような時代でしたからね。

峯尾 今からは想像できない時代ですね。

石塚 その当時では、男女共学にして、進んでほしい高校なんですけどね。



司会 そういう意味で、徳山先生は皆さんをかばってくれていたのですね。

横山 徳山先生は、新任で高田高校にいらしたんですか。

峯尾 若くしておいでになったんですよ。バドミントン部にかかわられたのも、徳山先生が赴任して2年目でした。

石塚 音楽の講師だった徳山先生(高7回)と結婚されて、旧姓藤島から徳山先生になりました。

峯尾 「練習のせいで勉強ができないといけない」と、夏に化学の補習をしていただきました。まさに個人レッスンです。

石塚 夏は廊下に机を出して勉強したものです。

横山 私は、廊下が満杯の時は、屋上で勉強・読書しました。屋上の陽が当たらない、風の当たる所を選んで。

石塚 徳山先生には、ご自宅にも伺ったり、本当にお世話になりました。

横山 徳山先生とは方向が同じでしたので、一緒に帰ったりすることもありました。一緒に帰る人はもう一人いたのですが。

全てに対して情熱があったのだと思います。先生は、とことん生徒と付き合おうとしていました。

司会 草創期は徳山先生との繋がりが深かったのですね。

部室の変遷で分かる環境の変化

今まで出ていなかった話で、これはぜひ皆さんに紹介しておきたいということがあればお願いします。

横山 当時、更衣室とがなく、当然男子・

女子別で更衣室があってもいいはずなのですが、女子の部活が創設された割には、階段の下の普段掃除道具を置くような三角のスペースで着替えたりしました。狭くて、他の人ともぶつかりそうになりながら着替えていました。にわか作りで作ってもらったというのではなく、中にあるものをどかして着替えていたものです。その後、部室や、更衣室、シャワーなどができたようですが、当時は考えもつかなく、先生達に要望すらしなかったものでした。

峯尾 とにかく部として認めてもらっていないような、本当に肩身の狭いような時代でした。

横山 そうした中でやってきたんですよ。ないのが当たり前と思っていたので、別に不自由は感じませんでした。

峯尾 当時は体操部が全盛の頃ですから、バドミントンなんか追いやられているような感じで。ただ、女子がバドミントンをやっているから珍しいという感じで、剣道部の人からみれば、そういう意味では、にやっというのもあったかもしれません。



1961～2年頃

皆さん本当に、バドミントンがやりたくてというよりも、何人か集まらないと部として認めてもらえないからというので、即席に集めて、というようなところもあったような気がしますね。

司会 石塚さんはいかがですか。特別の思い出はありますか？

石塚 当時、プールの脇にバラックですけど部室があったんですね。狭いながらも、また物凄い汗臭い部屋ではありましたが、部室がありましたね。そういう意味では他の部と対等となりました。

今もある40年前にあけた「穴」

石塚 私が一番思い出深いのは、当時、体育館で練習していましたが、麻の紐で作ったネットを、木のポールで置くんですね。両サイドをヒートンで留めていただけなので、ぐらぐらして弛んでしっかりしないんです。それなので、金属製のポールを立てる必要がありました。ポールを立てる穴を床にあけるための交渉をするのが大変でした。加藤先生が顧問でいらした体操部等から、「こんな所に穴をあけられたら困る」という、ものすごい反対があったのを、大会での活躍の実績をひっさげて交渉し、成功したのが本当に良い思い出でした。それ以来、あそこに穴があいているんです。もちろん終わったら蓋をするんですよ。それが1967年頃です。

この間高田高校へ行ったとき、穴があいているのを見て、「この穴をあけたのは、僕なんだよ。今から40年前にやっとあけてもらったんだ」と現役の人達に話したことが

あります。

ローヤルクラウンコーラの思い出

和田 私の代の男子は、結構高田市内の人が少なくて、一人ぐらいしかいませんでした。私は新井で、あとは三和村など、高田から離れたところから来ていました。部活が終わると、正門の前の店でローヤルクラウンコーラを飲んで、自転車・バイクで帰ったのを覚えています。

司会 湯川ですね。私は軟式テニス部でしたが、コートを超えるとそこがすぐ湯川で、練習が終わるとよくコーラ500ccを買って飲んだのを覚えています。

「自分だけの部屋」だった部室

内海 私も部室の話なのですが、私の時代は体育館の更衣室の反対側がバドミントン部の女子の部室でした。そこで着替えて、講堂の体育館側で練習をしていました。私はよく授業をさぼって、その部室で時間を潰していました。

司会 部室で例えばどんなことをしていたのですか。

内海 本を読んでいたような気がします。英語が大嫌いで、英語の時間はそこにいました。あと、体育の授業のときは、皆は更衣室で着替えるのですが、私は部室で着替え、自分だけの場所、というような存在でした。

石塚 その当時は出たくない授業は出なくても大丈夫だったのですか。大学みたいですね。

横山 私達の時代も授業をさぼるなんて思いもつかない。

バドミントン部創立50周年を 迎えての思い

内海 本当は出ないとまずかったのかも知れませんが、私は悪い子なので、英語の授業のときはそこにいました（笑）。

司会 昔の階段下時代と比べて、居心地が大変良くなったんでしょうね。

峯尾 今と昔とでは話が全然違いますね。

内海 男子は、武道場（編集部注：平成3年、講堂、体育館の奥に設置された）の二階、バドミントンもバレーもバスケも一緒のところに部室があった気がします。

横山 私たちの時代は、体育の授業時の更衣室というのなかったですよ。

峯尾 教室でしたよね。

横山 内海さんの時代には体育の授業時の更衣室というの、もうあったわけですね。

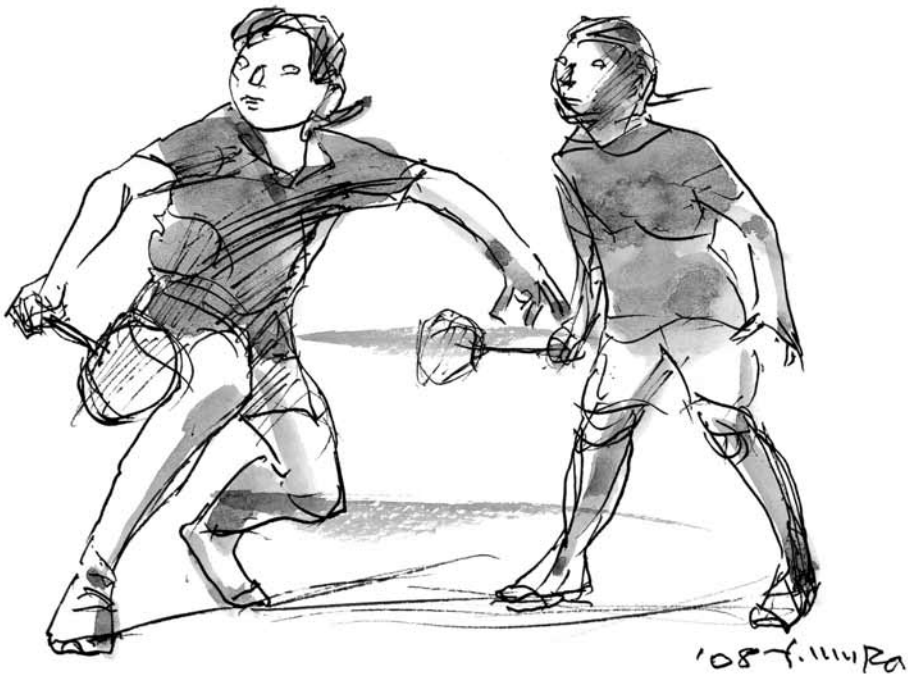
内海 はい。そこにシャワーもありました。

石塚 昔は階段下だったというのに（笑）。

司会 50年というのは、ある意味あっという間だったかも知れません。50年前に入られた方と、比較的最近卒業なさった方がこうして話すのは感慨深いものがあると思いますが、50年経って感じること、後輩に伝えたいことはありますか。

峯尾 石塚さんからお電話をいただき、私たちの頃からの繋がりがあるのが分かり、「バドミントン部に入っていてよかったな」、ありがたく、とても楽しいと感じます。

文化部と違い、運動部は「同じ釜の飯を食べた仲」というのがあり、その人のいい点も悪い点も、知り尽くすまではいきませんが、何となく分かっているだけに、ふっと、その時代に戻れるような気がして嬉し



いです。こうして50年誌を作っていただき、50周年の会で引き合わせていただいて、ありがとうございます。

横山 私は運動が苦手です。克服するために入ったのですが、今思えば、その当時バドミントン部にいたことは、「青春の一ページ」を飾れたかなと思います。現役の高校生にも、部活動は人間形成につながるもので、3年間、勉強だけでなくてよいと言ってあげたいと思います。

石塚さん、先日の「50周年を祝う会」では、いろいろご苦労も多かったと思うのですがお疲れ様でした。あの会がなければ、こうして先輩・後輩の元部員だった人達とお会いすることもありませんでした。

石塚 私も卒業して以来、いつも夕方部活においてになっていた先輩の市川進さん、瀧澤さんにお会いしたいと考えていました。

現在私は東京電機大学の教員をしているのですが、たまたま去年、今の職場のバドミントン部の50周年だったんですよ。私は学生厚生役職をしているもので、このためのお祝いの言葉を書けと言われて、「なんでよその学校の50周年のお祝い文を書かなくちゃいけないのだろう。自分のところ(高高)はさてどうなんだろう」と思いました。これが50周年の行事をやった一つの動機です。

もう一つは、去年の1月に高田高校の同級生の中で、自分の代である68年卒の間でのmixiでのコミュニティを作ったところ、そこから転じて、高田高校の若い世代のmixiのコミュニティがあるのを見つけました。それに入り込んだところ、高田高校

のバドミントン部のコミュニティがあるのが分かったんです。それを見たら、若い方々がしきりに交流していることが分かったので、私もメール交換をすることになり、「平成時代の方と昭和時代の人達が繋がらなければいけないな」という強い気持ちになりました。

そこで、50周年の時期が来ていることと、また、個人的にも先輩方にも会いたいという気持ちが一緒になって、第一は50周年の会を開催し、それをステップとして、平成時代の人と昭和時代の人と交流できて、実際には、今の部員を物心両面で支援してあげようになりたいなと思いました。藤井先生によると、今の部員は、一人ひとり自分達がシャトルを買って大変な状態だとのことであり、我々が支援できるのではと思います、それが今年の50周年でのイベントへと繋がりました。これで第一ステップができたのかと思います。

和田 私は自分の前後の代しか知らなかったのですが、こうした会を設けていただいてよかったです。現役の人も、卒業してからなるべく顔を出して繋がりを求めて欲しいと思います。

今の現役の顧問の藤井先生は私の同級生なので、当時はバドミントン部ではありませんでしたが、なるべく実家に帰ったときには繋がりをもちたいと思っています。

司会 藤井先生のご専門は何ですか。

和田 数学です。

峯尾 数学が多いですね。

司会 先程の石井先生も数学でしたね。丸谷先生も数学で、徳山先生は化学でしたが、

初期の頃の副顧問でいらした岩田先生も数学の先生ですね。バドミントン部の先生は理系が強いのですね。

内海さんはどうですか。

内海 バドミントン部で集まる機会があって、いろんな離れ離れになっていた先輩・後輩が繋がるのが改めてできたので、卒業してもこのようなコネクションを持って行って欲しいなと思いました。

峯尾 私は一年間、高田高校関係のことで外出することが多いんです。お正月はゴルフコンペに出ています。それに始まって、6月の総会でしょ…。夫に「随分行事の多い学校だなんて言われました。

確かに結束が固い学校ですね。ただ、学年によって違います。

将来の課題は地域への貢献

司会 皆さんの中で、地域で教えている、という方はいらっしゃいますか。

石塚 私たち自身は特にありませんが、新発田商業でバドミントン部の顧問をされている松永（昌範（高34回））さん、徳山先生に習った市川克行さん、ことに市川さんは、上越のバドミントンの役員をされています。このような方々がOB会の顧問なり、会長をしていただければ一番いいなと思います。

私は、もう少ししましたら、今後はスポーツだけでなく、文化についても軸になれるよう、OB会などで上越の老若男女のコミュニケーションをしていきたいです。

司会 いいお話ですね。母校や上越をどう支援できるかというのは、大きな課題です。

最後に、何かありましたらお願いします。

峯尾 石塚さんの時代にはしっかりされていますが、私の時代は同好会的でした。練習メニューもなかったですし、そんなに重くとらえていたこともない。「そういえばバドミントンをやっていた」という感じです。

石塚 昭和時代のバドミントン部は、ある程度サークル的だったのが、平成時代になって選手育成に力を入れたので、先輩の代から最近の方までを結ぶ活動をしようと思い立ちました。

第一に、顧問の先生同士を一堂に会して仲良くして戴くのが効果的かと思いました。電話してみたところ、菊池先生以外全員いらっしゃいました。徳山先生も驚かれました。

顧問の先生方をつなぐのが、昭和・平成連結の鍵です。そうすれば、生徒・OB 同士も自然と仲良くなります。徳山先生はご自分ひとりが顧問だと思っていらっしゃったようですが、私からは、それだけ時代が過ぎたことを伝えました。

和田 私は、今後は総会に出てみたいと思います。会社に入社した直後は出席していたのですが、同年代の人たちが少なく、遠ざかるようになってしまいました。

峯尾 今年はテーブルの配置もよく、普段話さない代の方とも交流できたのが良かったです。

司会 今回の座談会や総会出席をきっかけに、皆さんの交流が一層深まっていけば幸いです。

長時間ありがとうございました。

「高田高校バドミントン部創立50周年を祝う会」

平成20年5月3日 於：高田やすね

高田高校バドミントン部は、男女共学となった1950年(昭和25年)から8年後の1958年(昭和33年)6月11日に、まずは女子のみで誕生しました。その後数年して男子が参加し、2008年(平成20年)6月に創立50周年を迎えることになりました。

この度これを機に、創立時の顧問であった徳山(藤島)先生のご協力も得て、発起人でもある高20回生の石塚正英さんを軸に、高18回生の太田(田辺)法子さん、高20回生の伊藤(小菅)恵子さんなど、東京・上越共同で昨年から名簿作りが進められ、本年5月3日に高田やすねに於いて「高高バドミントン部創立50周年を祝う会」が開かれました。

一番古くは昭和37年卒から、平成7年卒までの32年間にわたるOB・OG39名に加え、初代から現役までの顧問の先生方11名のご出席をいただき、総勢50名の久しく途絶えていた新旧交歓の場となりました。

また、あちらこちらでは、先輩、後輩、

同期を見つけ、握手をしたり肩をたたきあったりと再会を喜ぶ笑顔が交わされました。

徳山先生はお話の中で、バドミントン部出身者は、その後社会人となっても、ずっと続けている人が多いのだと言われました。確かに、何時でもどこでも相手さえいればゲームが出来るという気軽さが、続けられる要因の一つでもあるのでしょうか。とはいえ、真剣に勝負をするととなると、なかなかそう気軽なスポーツではないことはすぐに思い知らされるのですが…。

名簿の掘り起こし作業からこの度の会の開催まで、伝統ある流れを一本に繋げる記念すべき日の開催に向けてご尽力されたOB・OGの皆さんの熱意は、当時を思い起こさせるものでもあり、またこれからのバドミントン部の更なる発展に大きな力となることと信じ、大いに期待しています。

谷 真知子 (高20回)

